

環境ボランティア・草津湖岸コハクチョウを愛する会

松村勝

草津湖岸コハクチョウを愛する会, 525-0065 滋賀県草津市橋岡町111-2

はじめに

環境ボランティア・草津湖岸(エサ場)コハクチョウを愛する会の活動拠点は滋賀県草津市志那中地先, JR琵琶湖線草津駅よりタクシーで約10分の場所である(図1)。草津市は人口11万人, 滋賀県第二の都市です。

草津は東海道と中仙道の分岐点で昔から宿場町として栄えてきた街ですが, 近年京都や大阪のベッドタウンとして賑わっています。昨年も我々の活動を市の広報誌に紹介して貰ったところ, 翌日からコハクチョウの見学者が大勢こられました。

私達は, 次の世代を担う子供や孫達のために, コハクチョウを始めすべての水鳥達が, 草津湖岸(エサ場)に飛来する環境づくりを目的とし, 「みんなで出来る環境づくり」をモットーに, 平成12(2000)年3月3日, この会を設立しました。

エサ場周辺の環境整備, 見学者の案内, 仲間の育成などを実践しながら会員相互の親睦を図っております。

活動内容

コハクチョウが草津湖岸に飛来するのが12月初め, それから100日間越冬するのです(図2)。春の初めにシベリアでふ化した幼鳥が11月の初めには北海道に飛来して日本

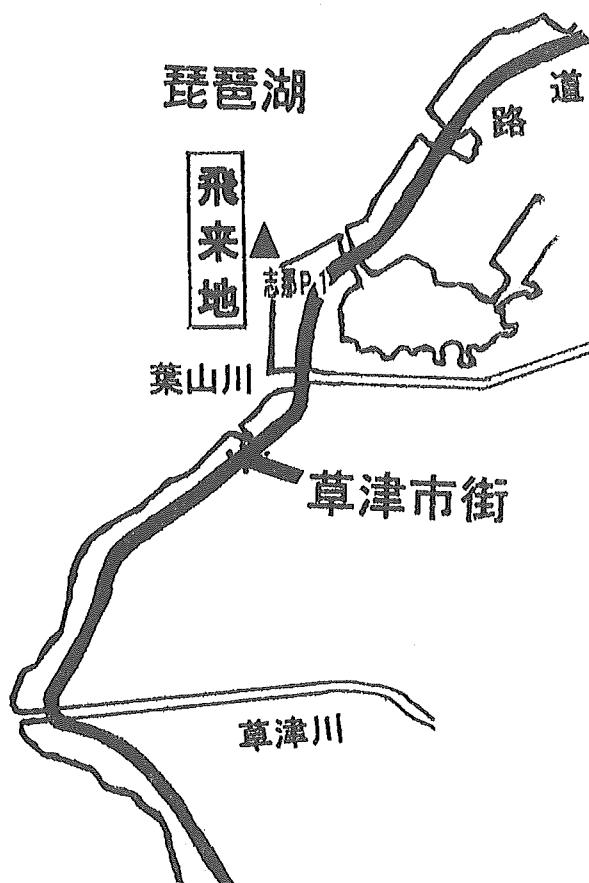


図1. 草津湖岸のコハクチョウ渡来地位置図.

海沿いに転々と南下して草津湖岸に毎年30羽前後が到着します。数は多くありませんが、コハクチョウ1羽当りの見学者数は日本一でしょう。

このころになると、琵琶湖も風が強く波も大きく湖も荒れだし、流れ藻や漂流物が湖岸に打ち上げられるので会員の手で除去しています。

越冬中の約100日間、朝日がのぼってから日没まで犬や猫を散歩に来て放したり、釣り客が鳥に向かってルアーを放ったり、写真愛好家たちの行儀が悪いので、マナー



図2. 草津湖岸のコハクチョウ



図3. 写真展の準備.

を守ってもらうよう指導をしたり、捨てられたテグスを放置すれば水鳥の足に巻き付くので、これらの回収活動もしています。

啓発活動

琵琶湖の湖北や湖西はまだまだ水が綺麗ですが、飛来地の南湖では水の汚れが酷く、コハクチョウが草津に来て子育てをするぎりぎりの環境です。これ以上悪化させることは出来ません。会員の中に写真がプロ並の人が数名居りますので、県下で4～5ヶ所ですが「湖の白い妖精」と題して出品数60点程度の啓発写真展を開催させて頂きました(図3)。「こんな綺麗で素敵なコハクチョウがの姿を次の世代の子や孫たちに残したい」という私たちの思いを理解して頂ければ必ず琵琶湖が綺麗になると信じています。

写真展

2001年度の写真展開催実績と予定

- 2001年3月24・25日 こどもエコクラブ全国フェスティバル
- 2001年5月1日～6月24日 ダイニクアストロパーク天空館
- 2001年7月10日～29日 秦荘町ハテイセンター
- 2001年8月7日～26日 草津市立みずの森水生植物園
- 2001年12月11日～27日 滋賀会館ギャラリー

飛来して数週間もたてばコハクチョウや水鳥も陸に上がってきます。数年前までは心無い大人がいたずらをしたり、犬がコハクチョウに飛びかかる事故があり、数



図4. 湖岸での水草揚げ

十日間居なくなり探したこともありました。

軽トラックに数台分の流れ藻やゴミ類がこの浜にたどり着くのです。飛来する条件の一つは、遠浅の浜で綺麗な水藻が沢山あることです。遠浅の浜ゆえにゴミ・流れ藻もたどりつくので会員で除去します(図4)。

カメラ愛好家が土曜日・日曜日ともなれば20人前後と、一般の見学者でいっぱいになります。(この中には会員の大勢居ります)(図5)。



図5. 写真撮影の人々.

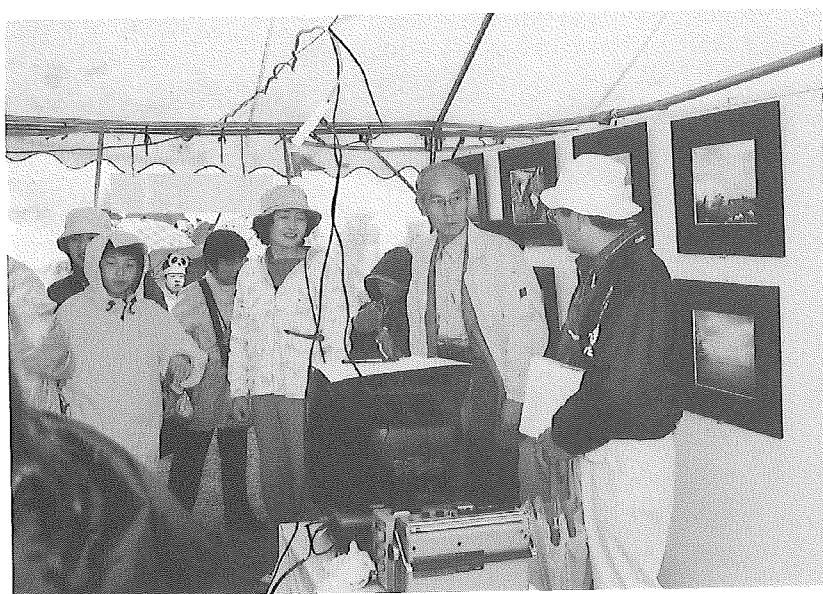


図6. 子供エコフェスタ

活動の一つとして、事故を防ぐがために、水辺から5～6m下がって貰うためのロープを張る作業があります。当初私もこのロープを張ることに抵抗がありましたが、白鳥が驚いてしまって二度と飛来しなくなることもより良いかと妥協しました。

こどもエコクラブ全国フェスティバルでのコハクチョウのブース会場には雨降りでしたが、子どもたちが沢山きてくれました(図6)。



図7. 地元の小学校観察会.

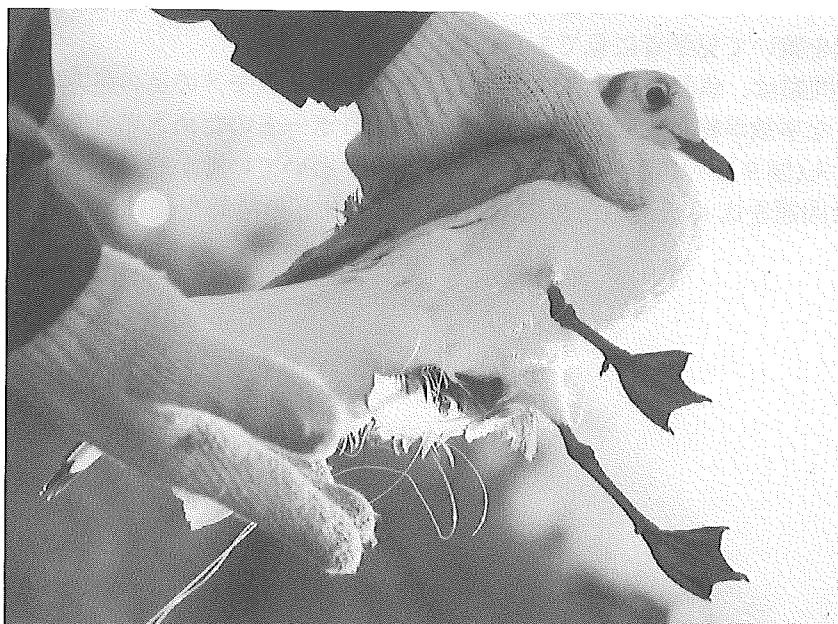


図8. 釣り糸がからまったユリカモメ.



図9. 釣りボートに恐れる水鳥たち。

お父さん・お母さんと一緒にユリカモメに餌やり体験をして貰っています。餌は食パンの耳です。

近くの特別擁護老人ホームから付添の方と一緒にときどき見学に来ていただいています。こんな近くにコハクチョウがいるなんてと喜んでいただいています。

近くの小学校の水鳥観察教室で子どもたちにパネルで説明をしているところです(図7)。コハクチョウの飛来地のパネルは、写真展でも展示しました。

望遠鏡を置いて見学者に見てもらっています。

一番の問題は、魚釣りのテグスが水鳥、とくにユリカモメの足の絡みつくことで、このような事故が絶えません(図8)。また、釣りボートのため水鳥たちが落ち着いて休めません(図9)。人間と自然との共生をどうきづいていくかを考えるとともに、このような問題を広く訴えるために写真展の開催などの活動を続けるつもりであります。